

府中町あるさと歴史散歩

〔第37回〕

大化の革新と律令制と安芸国(あきのくに)の成立①

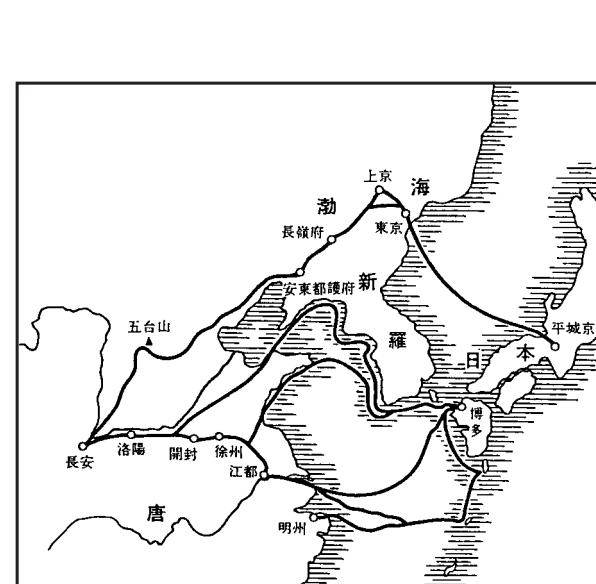
安芸国がいつごろ、何を契機に誕生し、どのような仕組みであったのか、また、何を手本にしたのか、それに国府が置かれたころの府中の様子について明らかにしてみたい。

古代における日本の歴史的展開は、大化年間(645~649年)に朝廷で行われた「大化の改新」と呼ばれた一大政治改革でもって国家体制、政治の仕組み、地方の政治とその仕組みなどが大きく変わった。改新前までは、大和朝廷は天皇を中心には、有力氏族が中央政治をつかさどり、伴造が部民を管理し、一方、地方政治は國造などの豪族が土地や人民を支配していた。しかし、改新では、世襲職制に基づく旧來の氏姓制度と私地私民を否定し、隋・唐の律令制度にな

らって官僚制と人びとを戸籍に登録させ、公地公民制に基づく天皇を中心とした中央集権体制を実現することをめざしたのであった。このような急激な体制の転換を必要としたのは、東シナ海や日本海を隔てた大陸や朝鮮半島などの国際情勢を抜きにしては語ることができない。

中国大陸では、中国史上かつてない分裂の時代であった魏晉南北朝時代(後漢の滅亡から隋の統一まで)の後に、きわめて強力な中央集権国家の隋唐帝国が誕生する。六世纪以降、隋・唐の統一帝国が成立すると、その武力的脅威から東アジア諸国および周辺の異民族の間に、にわかに緊張化の様相を呈するようになつた。それは百濟・高句麗のよ

うに征服されて滅亡するか、突厥のように服属されるか、あるいは「朝貢」して中国皇帝の臣下となる「冊封」を受けるかであった。東アジアの諸民族の多くが隋・唐の直接は行つたが冊封のような従属関係は全く結ばなかつた。しかし、わが国はこのような国際情勢への対応をにらんで、隋や唐にならつて、国内の政治体制の整備と強化の必要性を自覚し、新しい国家建設に着手したのであつた。



(図) 遣唐使船の航路図

推古天皇22年(644年)まで前後6回に及んでいる。使節一行の中に、留学生や学問僧が同行し、隋の進んだ諸制度や文物についての新知識の習得に努め、帰国後、日本の政治機構の改革や文化の発展に大きく貢献したのである。遣隋使は614年を最後とするが、この事業は遣唐使に引き継がれていくことになる。

遣唐使は七世紀から九世紀にかけて唐王朝へ派遣された公式の使節である。舒明天皇2年(630年)に犬上御田鉢を派遣したのを最初として、寛平の事業は遣唐使に引き継がれていくことになる。

府中町文化財保護審議会会長
教育委員会生涯学習課
横田 稔昭

問い合わせ

☎ 286-3272

6年(894年)に菅原道真的建議によって中止されるまで20回が計画されたが、そのうちの16回が実施された(計画・実施回数には諸説あり)。遣唐使の船は当初は二隻であったが奈良時代には四隻となり、一度に500人近くのものが渡唐した。

(38回へ続く)